櫛形町文化財調査報告　No－15

町内遺跡試掘調査報告

――町道11号線建設に伴う赤面Ｃ遺跡試掘調査他――

1996

櫛形町教育委員会

目　　次

序　　文

例　言（凡　例）

第Ⅰ章　遺跡を巡る環境 …… 1
　第1節　自然環境 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 3
第Ⅱ章　町内遺跡調査の成果 …… 4
　第1節　アルプス出店予定地内遺跡（八田畑B遺跡）確認調査 …… 4
　第2節　小笠原小学校改築に伴う（伝）小笠原氏館跡遺跡試掘調査 …… 6
　第3節　個人住宅建築に伴う若宮遺跡試掘調査 …… 7
　第4節　町道11号線建設に伴う吉田西原A・B遺跡及び赤面C遺跡試掘調査 …… 7
第Ⅲ章　結　語 …… 11
引　用・参考文献 …… 11
報告書抄録 …… 12

挿図目次

第1図　遺跡位置図及び周辺遺跡分布図〔1／25000〕 …… 2
第2図　遺跡周辺地形図(1)〔1／10000〕 …… 4
第3図　アルプス出店予定地内試掘トレンチ位置図
　及びセクション図〔1／750・1／120〕図 …… 5
第4図　アルプス出店予定地内出土遺物〔1／3〕 …… 6
第5図　小笠原小学校改築用地内試掘トレンチ位置図〔1／2000〕 …… 6
第6図　個人住宅建設用地内試掘トレンチ位置図〔1／800〕 …… 7
第7図　遺跡周辺地形図(2)〔1／10000〕 …… 8
第8図　町道11号線建設用地内吉田西原A・B遺跡試掘トレンチ位置図
　及びセクション図〔1／1200・1／120〕 …… 9
第9図　町道11号線建設用地赤面C遺跡試掘トレンチ位置図〔1／1200〕 …… 9
第10図　町道11号線建設用地内赤面C遺跡試掘全体図
　及びセクション図〔1／300・1／120〕 …… 10
第11図　赤面C遺跡出土遺物〔1／3〕 …… 11

写真図版目次

図版Ⅰ　アルプス出店予定地内トレンチ交差部
　吉田西原B遺跡試掘トレンチ全景
　吉田西原B遺跡試掘トレンチ土層堆積状況
図版Ⅱ　赤面C遺跡試掘トレンチ全景
　赤面C遺跡焼土ブロック散乱状況
　赤面C遺跡出土遺物

序　　文

櫛形町は、峡西地方の中央に位置し、櫛形山の山麓に発達した町であります。２万年近くまえから人々の生活が始まり、以来長い歴史の中で常に峡西地方の中心として栄えてきました。

現在櫛形町では、町の総合的な長期計画のもと、「美しい自然、美しい街なみ、美しい心」の町づくりをめざしてさまざまな施策を立案、実施しております。それらの諸事業実施に先だって埋蔵文化財の保護をはかるため今回国・県の補助を頂き、発掘調査を実施いたしました。

幸い、今回の調査において多くの重要な事柄が発見され、さらに従来の知見に付け加えるべき新たな事実も確認することができましたことは、本書に述べる通りです。

この調査の結果が、地域を知り、地域の歴史を次代に伝えていく意義ある資として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査、ならびに報告書作成において種々ご指導・ご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げる次第でございます。

平成８年３月

櫛形町教育委員会

教育長　野　中　藤　雄

例　　言

1、本書は、平成７年度に行った櫛形町内遺跡―赤面Ｃ遺跡他―試掘調査報告である。
2、本調査は、平成７年度文化財保存事業として、櫛形町教育委員会が国・県の補助金を受けて実施した。
3、調査組織は以下の通りである。　調査主体　櫛形町教育委員会　　調査担当　清水　博（櫛形町教育委員会）
4、発掘・整理作業参加者
相川はるみ、饗場うさ乃、川崎しげみ、神田久美子、桜田和子、桜田定子、桜田みさえ、長沼豊子、由井伴三、若林初美
5、本報告書作成の業務分担は下記の通りである。第Ⅰ～Ⅲ章、写真撮影―清水、遺物の実測・トレースー若林
6、本調査及び報告書作成にあたり、下記の方々からご指導・ご助言を頂いた。記して謝意を表する次第である。
保坂康夫・出月洋文（山梨県教育庁学術文化課）、新津健・米田明訓・中川誠二（山梨県立埋蔵文化財センター）、田中大輔（昭和町教育委員会）
7、発掘調査によって得られた出土遺物、記録図版及び写真等は櫛形町教育委員会において保管している。

凡　　例

1　遺構実測図の水糸レベルは海抜高を示す。
1　遺構図及び遺物出土位置図等現場において作成した図面はすべて国家座標第Ⅷ系によっている。
1　スクリーン・トーンの表示は以下の通りである。　焼土範囲　遺物・炭化物散乱範囲

第Ⅰ章　遺跡を巡る環境

第1節　自然環境

櫛形町は、山梨県の西部中央に位置し、山梨県元標（山梨県庁）からは約14kmの距離を隔てている。甲府盆地西部を、北から南へ緩い弧状を呈して貫流している釜無川以西の地域を峡西地方と呼んでいるが、櫛形町はその中央に位置している。

盆地から西を望むと、南アルプス連峰と呼ばれる冬期白雪を頂く赤石山脈を仰ぎ、その前方にはやや高度の低い巨摩山地を望む。巨摩山地の中央には、櫛形山と呼ばれる大きく櫛の形をとった山塊がそびえているが、櫛形町はその山裾に発達した町で、町名も櫛形山に由来するものである。

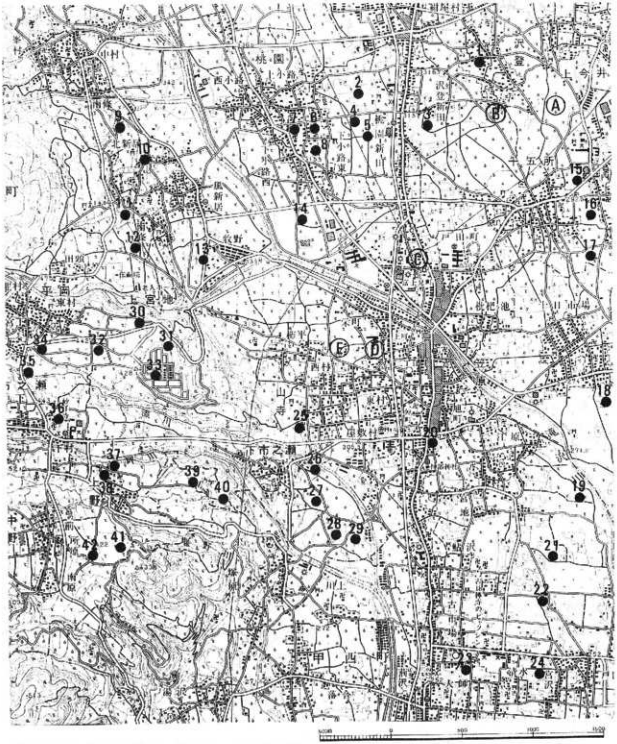
櫛形町は地誌的、地形的に大きく三様に区分され、それぞれ極めて対照的な特徴を示している。すなわち町内西半部では櫛形山が大きな山容を誇り、中央部はその東麓に発達した市之瀬台地が占めている。また東半部は櫛形山から流れだした諸河川がつくりだした扇状地となっている。

櫛形山を主座とする巨摩山地やその背後に連なる赤石山脈は、糸魚川－静岡構造線の一部をなしているが、そのため櫛形山腹に幾条かの断層崖地形が刻まれている。櫛形山の中腹に南北に連なる高尾、立沼、伊奈ヶ湖、泊平等の平坦面や沼地は伊奈ヶ湖断層によって生じた窪地を成因とするものである。また、櫛形山裾は上市之瀬断層が存在し、標高400～500mで傾斜変更線を経て市之瀬台地に続いている。

櫛形山の東麓にひろがる市之瀬台地は、上市之瀬断層前面に発達した更新世扇状地が、甲府盆地形成に与った最も新しい地殻変動によって形成された丘陵状の地形である。台地は南北4km、東西2,5kmの扇形平面を呈し、標高は400～500mを示している。台地前面は比高差100～120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床の扇状地へ至る。台地先端は、断層運動に伴って発達した小円頂丘がならび、この西側はなだらかな逆傾斜面を経て西方山麓へ向かって順次高まっていく。台地基盤は櫛形山塊に由来する古い扇状地堆積物で、その上面は火山性堆積物で覆われ、上部から新期信州ロームに対比される伝嗣院ローム層、古御岳に由来する黄白色軽石層（Pm－1）、中期信州ロームに相当する上野山ロームの順となっている。

この市之瀬台地上面には、北から高室川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等が流れ、侵食地形を刻んでいる。櫛形山を水源とするこれらの諸河川は、上流では18°～22°という急激な勾配をもって流れ落ち、盆地床にいたると急激に流勢を弱め、みずから削り流した大量の土砂を堆積させて谷の出口から扇状地を造る。ところで櫛形町に北隣する白根町・八田村にはこれも巨摩山地から流れ出る御勅使川の形成する大扇状地がある。この扇状地は幅10km長さ7kmに亘り、釜無川以西の北半部を占める広大なものであるが、櫛形山から流れ出る諸河川の造る扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」をなしている。これらの扇状地にあたるこの一帯は、時には1～2mにも及ぶ砂礫の厚い扇状地堆積物に覆われ、極めて地下水位が深く水に乏しい乾燥地で、かつ豪雨時には洪水におそれる水田経営に不適な地勢である。この地域は古来から「原七郷」とよばれ、「原七郷は月夜でも焼ける」といわれるほどであった。

地下に滲みこんだ水は扇端部では再び湧きだして、若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・鮎沢等と弧状に連なる湧泉列をなしている。この湧泉列から低位は極めて水の豊富な一帯となり、釜無川の形成する氾濫原へ続いている。この氾濫原は古来「田方」と呼ばれ、水田経営を主体としてきた地域である。一方水に乏しい扇央部は乾燥地帯で、「原方」と云われ江戸時代は木綿やタバコの栽培が盛んで明治以降は桑畑や果樹園に利用されてきた。また、台地から扇頂部にかけては「根方」とよばれ、山の根にあって、谷川の水を利用した水田や台地上の畑に依ってきた。このように地域の自然環境の特質は、それぞれの地域の生活・文化等と有機的な関係を示し、まさに地誌的な特徴を顕している。



A. 吉田西原A、B　　B. 赤　面C　　C. 八田畑B　　D. (伝) 小笠原氏館　　E. 若　宮

1. 永面B　2. 宮　原　3. 鼠　作　4. 東　畑A　5. 東　畑C　6. 東畑E　7. 東　畑F　8. 大新井G
9. 神　明B　10. 神　明A　11. 無名墳　12. 御崎神社横　13. 曽　根　14. 西　原　15. 十五所　16. 吉田西原D
17. 村前東A　18. 二本柳　19. 白河東　20. 下宮地　21. 油　田　22. 中川田　23. 住　吉　24. 大師東丹保
25. 宝珠寺西　26. 狐塚古墳　27. 鋳物師屋古墳　28. 鋳物師屋　29. メ　木　30. 東　原B　31. 六科丘古墳　32. 長田口
33. 六科丘　34. 中　畑　35. 久保田A　36. 石原田　37. 上の山　38. 椿　城　39. 上ノ東　40. 物見塚古墳
41. 東久保A　42. 古屋敷

第1図　遺跡位置図 及び 周辺遺跡分布図〔1／25000〕

第２節　歴史的環境

釜無川の右岸、櫛形山の山裾に発展した櫛形町は、西半部を櫛形山とその東麓に形成された市之瀬台地が占め、東半部は盆地床縁辺の扇状地となっている。すなわち地形的に大きく山地・台地・扇状地に分類され、そのため地誌的にも極めて対照的な相様を示していることは前節において述べたところである。

平成元年度に実施された遺跡詳細分布調査によれば、町内には現在239ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が確認されていたが、遺跡の数はその後の確認も加え現在では260ヶ所にのぼっている。遺跡は主要には台地、扇状地上に認められるが、櫛形山中の断層によって生じた平坦面にも縄文時代を中心とする遺跡が僅かながら確認されている。また、最近の甲西バイパスに伴う事前調査等によって、従来「皿方」と呼ばれた厚い堆積土に覆われた沖積地においても多くの遺跡が確認され、また、近世以降の遺跡が主体をなすと考えられてきた扇状地内においても、厚い砂礫層の下部から弥生時代にさかのぼる遺跡が発見され調査が実施されている。

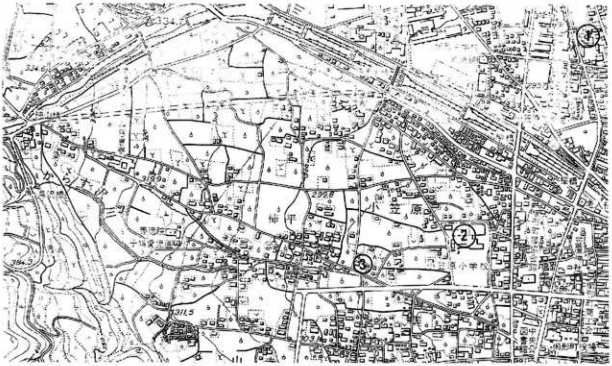
町内においても最も古い歴史的遺物は旧石器時代に由来するもので、市之瀬台地上からは数ヶ所（長田口遺跡32・六科丘遺跡33）にわたってこの時代にさかのぼる遺物がえられ、県内でも古い時代から人々の生活の場であったことを語っている。

この台地上では以来、縄文時代、弥生時代を通じて遺跡が営まれており、特に縄文時代中期（長田口遺跡32・東原Ｂ遺跡30・中畑遺跡34・上の山遺跡37・東久保Ａ遺跡41・古屋敷遺跡42）、弥生時代終末（六科丘遺跡33・長田口遺跡32・上の山遺跡37等）の良好な集落遺跡が点在する地域である。この台地の先端部ではまた、いくつかの前期古墳（六科丘古墳31・物見塚古墳40）が連続して築造され、その時代に於ける地域的中心であったことを示している。台地下の扇状地では、台地裾部を中心に縄文時代・弥生時代所産の遺跡（曽根遺跡13・鋳物師屋遺跡28等）が確認され、鋳物師屋遺跡からは重要文化財に指定された良好な資料が出土している。

扇状地における遺跡の一般的なあり方は、平安時代以降遺跡が進出する事を示している。古墳時代の遺跡は台地裾部（曽根遺跡13）及び湧泉列に沿って認められる程度であるが、平安時代になると町内全域に遺跡が営まれ、台地上にも再び進出する。近世の遺物は現在の集落とほぼ重なる分布状態を示し、現在の集落の成立時期を暗示している。しかし、前述したように、最近の甲西バイパスに伴う調査によって、沖積地や扇状地の厚い堆積層の下部から方形周溝墓群（十五所遺跡15）や弥生期の水田跡、古墳時代前半の大集落跡（村前東遺跡17）等が確認され、甲西町東丹保遺跡24からは前期古墳も発見されている。このことは、当該地に於ける歴史の見直しを迫るものであると同時に、従来遺跡の存在が確認しえなかった扇状地内に於ける開発行為に対しても注意を喚起するものと云えよう。

ところで、律令体制下では、本町内南半部から甲西町、増穂町にかけては『和名類聚抄』に甲斐国・巨摩郡九郷の一つとして所載されている「大井郷」に比定されている。また北半部からさらに御勅使川扇状地にかけては、平安時代から鎌倉時代にかけて「八田御牧」の一部をなしていたと考えられている。律令体制の崩壊後、甲斐国では甲斐源氏の一族が強大な勢力を持つに至るが、本町一帯は、小笠原〔櫛形町〕、加賀美〔若草町〕、秋山〔甲西町〕などの地名が示す様に、その一族が居館（伝小笠原氏館跡Ｄ）を定めた地である。小笠原氏の祖小笠原長清に関係する遺跡は町内各所に残されており、また上野の台地上には小笠原氏の一族上野氏や、後、戦国時代に武田大井氏が拠った椿城跡38が僅かに痕跡を止めている。町内にはその時代を物語る山城（中野城・笹砦）や石造物が各所に残され、中世以来の伝統や文化財を伝える社寺が多く現存している。江戸時代になると、西郡の中心として、駿信往還の要所として発展するがその姿は『甲斐国志』や『村明細帳』にうかがうことができるが、現在の集落の基礎はこの時期に形成されたものであろう。近代にはいり、明治４年（1871）山梨県が成立して以降、幾多の曲折を経たが最終的には昭和29年（1954）小笠原町、榊村、野之瀬村が合併し、さらに昭和35年（1960）農村を併せて、現在の櫛形町に至っている。

第Ⅱ章　町内遺跡調査の成果



1、八田畑B遺跡　2、(伝) 小笠原氏館跡遺跡　3、若宮遺跡

第２図　遺跡周辺地形図 (1)〔1／10000〕

第１節　アルプス出店予定地内遺跡（八田畑Ｂ遺跡）確認調査

１）調査に至る経緯と目的

(株) アルプスでは、櫛形町小笠原字八田畑地内においてボーリング場及びファミリーレストランの建設を計画し、町教育委員会に埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて問い合わせた。同予定地は往還東Ｃ遺跡に近接しており、開発予定面積も約6000㎡と大規模なものであった。また同地は既に人家が立っており、町内遺跡分布調査においても遺跡の確認が不可能な場所であったため、町教育委員会では確認のため試掘調査が必要な旨回答し、協力を要請した。両者において協議の結果、とりあえず建物敷地内の試掘調査を実施し、本調査及び駐車場部分については試掘調査の結果を参考に再度協議することとした。

調査期間　　平成７年７月10日～同月19日

調査面積　　217㎡

２）遺跡の位置と環境

ボーリング場建設予定地は櫛形町小笠原地内の、国道52号線沿いにあり現在既に市街地化している。

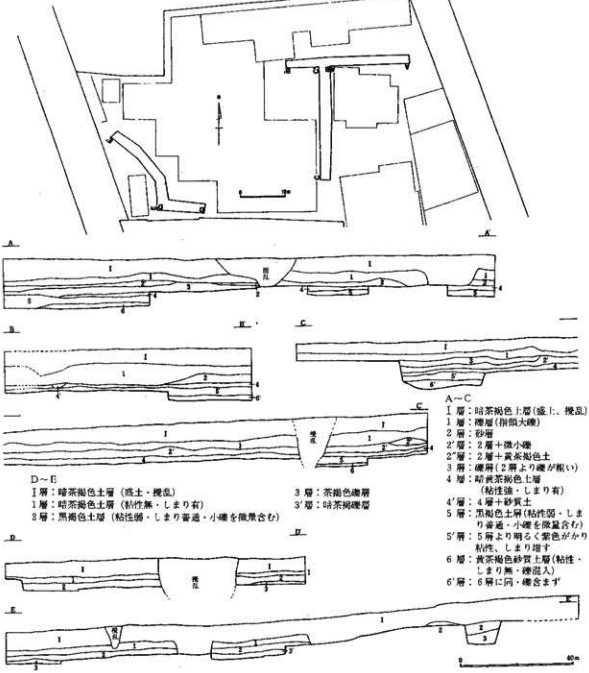
櫛形町の東半部は、御勅使川の造る大きな複合扇状地となっている。当該地は南東方向へ延びる微高地上にあたり、南300mには滝沢川が流れている。従来この扇状地内では遺跡の確認はなされていなかった。しかし、町内遺跡分布調査*[1]、甲西バイパス建設に伴う調査*[2]等によって多くの遺跡が確認されつつある。また、各所で実施した試掘調査*[3]によれば、遺構・遺物の確認はできなかったものの土壌の比較的安定した箇所も確認されており、注意を要する地域となりつつある。

３）調査の方法と経緯及びその成果

試掘トレンチは３本設定し、各々の規模は２×30m、２×25m、２×30m である。トレンチは、現状の人家の

解体作業とのかねあいもあり、空間地をぬう様に設定した。調査は、地表下1.5m迄重機によって排土し、後人力で精査した。第1・2トレンチでは地表下1.8mで砂混じりの黒色土層が確認されたが、第3トレンチでは1m程で多量の礫が混入した茶褐色土となっていた。この扇状地内で黒色土の堆積を確認したことははじめてであり、第1及び第2トレンチの交差する部分では十数点の遺物が集中して出土した。そのため遺構確認を期待して精査をおこなったが検出するには至らなかった。また、遺物がまとまって出土した範囲は後5m程で、それをはずれるとほとんど認められなかった。

調査の結果、少量ながら遺物が集中して出土したが断片化が進み遺構も検出できなかったため試掘を完了した。また出土層位も深かったため、工事の掘削深度が黒色土層に達する場合にはさらに立ち会いを実施する事とした。

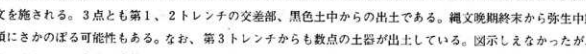


第3図　アルプス出店予定地内試掘トレンチ位置図及びセクション図〔1／750・1／120〕

4）出土遺物

総数で十数点の土器が出土したが、図示しえたものは3点である。

1、2は口縁破片。ともに濃茶褐色を呈し焼成は良好である。胎土はともに雲母、長石を含む。1は小形壺。2は口縁下に太い沈線が2条巡る。3は胴部破片。淡茶褐色を呈し焼成は良好である。胎土に雲母を含む。粗い縄文を施される。3点とも第1、2トレンチの交差部、黒色土中からの出土である。縄文晩期終末から弥生中期初頭にさかのぼる可能性もある。なお、第3トレンチからも数点の土器が出土している。図示しえなかったが、第1、2トレンチ出土の遺物とは明らかに相違しており、やや後出するものであろう。



第4図　出土遺物〔1／3〕

第2節　小笠原小学校改築に伴う（伝）小笠原氏館跡遺跡試掘調査

1）調査に至る経緯と目的

櫛形町教育委員会は、町内に於ける小・中学校の改築を順次行ってきたが、昭和63年度は小笠原小学校が改築の予定にあたっていた。同小学校は櫛形町小笠原字流間から同字御所庭に所在するが、『甲斐国志』[*4] によれば字御所庭付近は小笠原長清館跡と伝えられていた。また大正14年に於ける小笠原小学校の改築時には敷地整地の折に塚に埋もれた天神祠が発見され、現在「御所天神」として敷地隅に祭られている。また、これらの伝承等に基づいて昭和62年7月に町史跡に指定されている。そのため教育委員会では、校舎改築に先立って試掘調査を行い、遺構・遺物等の確認を行うこととした。

調査期間　昭和63年8月20日

～同月23日

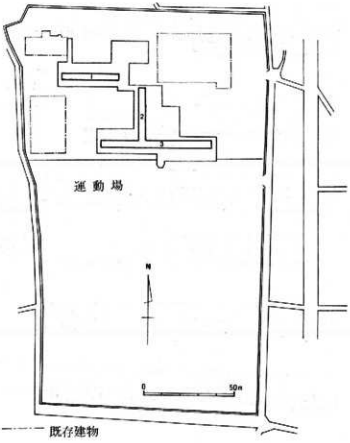
調査面積　120㎡

2）遺跡の位置と環境

小笠原小学校は櫛形町小笠原字御所庭に所在する。滝沢川の造る小扇状地扇央部の微高地上に位置し、特に東側では帯囲と50cmほどの比高差を保っている。『甲斐国志』にもあるように、御所庭は櫛形町の中心である小笠原の町並みに西隣している。現在校庭の南半となっている部分は、古絵図及び古老の話等によると、旧河道が通っており大正年間に於ける学校新築時に埋め立てたと伝えられている。[*5] その折、校庭部分をかなり削平したとも伝えられ、現状で校舎部分と校庭とは50cmほどの段差を持つ。

3）調査の経緯と成果

前述した様に、本敷地はすでにかなり削平されている可能性が強かった。そのため校舎改築予定地内に試掘トレンチを設定し、遺構・遺物の状況を観察することとした。試掘ト



第5図　小笠原小学校改築用地内試掘トレンチ位置図〔1／2000〕

レンチは３本設定し、それぞれ２m ×30m 、２m ×10m 、２m ×20m の規模で、東―西方向に２本、南―北方向に１本設定した。当初、地表下50cm迄重機によって排土し、後人力で精査する予定であったが、旧校舎の基礎部分から礫・砂礫層が続いていたため、１m まで重機によって掘り下げたが同様な状況であった。一部で旧基礎と同レベルから、それに伴うと考えられる石垣状の施設が検出されたのみで遺構・遺物は発見されなかったため調査を完了した。

第３節　個人住宅建築に伴う若宮遺跡試掘調査

１）調査に至る経緯と目的

櫛形町小笠原791-1において個人住宅の建築が計画された。当該地は若宮遺跡に隣接し、東300m には伝小笠原氏館跡が存在する。そのため原因者の協力を頂き、遺構・遺物の存在を確認するための試掘調査を実施した。

調査期間　　平成７年７月31日～８月３日

調査面積　　10㎡

２）遺跡の位置と環境

遺跡の存在する櫛形町小笠原字柿平は、市之瀬台地を流れ降る深沢川の造る小扇状地上にあたる。この扇状地は東に向かって扇を開いているが、等高線に直交するように幾筋かの尾根状の微高地が存在する。当該地は扇状地中央を延びる幅10m 程の尾根状微高地北縁にあたる。

３）調査の経緯と成果

住宅造成地は、特に北側隣接地とはおよそ１m 程の比高差を測り、北半部は既に土盛りがなされていた。しかし南半部については西から延びる微高地の縁辺部にのっており、若宮遺跡に続く可能性も考えられた。そのため建物敷地南半部に１×２m の試掘グリッドを５カ所設定し、人力で掘り下げた。しかしグリッド内も地表下20～30cmは客土が観察され、以下も礫・砂礫層が堆積していたため約80cm程掘り下げた時点で調査を完了した。

第６図　個人住宅建築用地試掘トレンチ位置図〔1/800〕

第４節　町道11号線建設に伴う吉田西原Ａ・Ｂ遺跡及び赤面Ｃ遺跡試掘調査

１）調査に至る経緯と目的

櫛形町では、平成７・８年度に於いて町内北部を東西に横断する様に町道11号線の建設を計画した。この道路は町道甲府―櫛形線と国道52号線を東西に結ぶもので、幅員は16m で総延長は約２kmに及ぶものである。路線内と隣接地には３カ所の遺跡が確認されていた。路線東半部は山梨県甲府土木事務所、同西半部は櫛形町の工事実施区域となっていたため、櫛形町教育委員会は先の２者と埋蔵文化財の保護に向けての協議を行った。櫛形町北半部は厚い扇状地堆積物に覆われ、過去の試掘調査*[6]においても遺構の確認がなされなかった地域であるため、今回も試掘調査を実施し、遺構が確認された場合本調査を実施することとした。

吉田西原Ａ・Ｂ遺跡

調査期間　　平成７年12月６日～同月９日

調査面積　　206㎡

赤面Ｃ遺跡

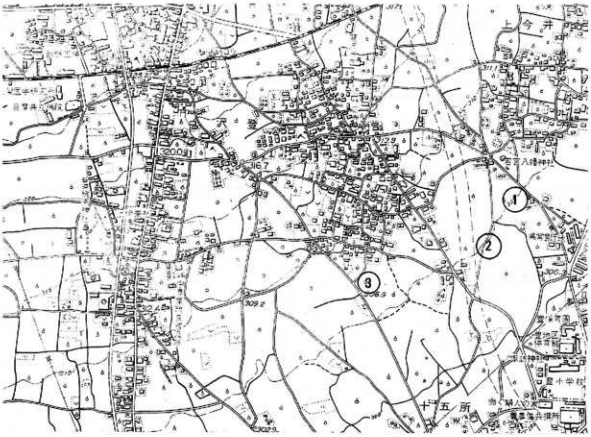
調査期間　　平成８年２月１日～同月13日

調査面積　　120㎡

２）遺跡の位置と環境

ａ　吉田西原Ａ・Ｂ遺跡

吉田西原Ａ・Ｂ遺跡は、櫛形町吉田字西原に所在する。町道11号線はこの二つの遺跡の間をすり抜ける様に東西に通り、吉田西原Ａ遺跡の北端部と同Ｂ遺跡の南端部をかすめて進んでいる。遺跡の一帯は、御勅使川扇状地



1、2 吉田西原A・B遺跡　　3、赤面C遺跡
第7図　遺跡周辺地形図(2)　〔1／10000〕

の扇央部に位置し、北西方向から南東方向に緩やかに降っている。この地域は櫛形町内でも一番水利の不便な地帯で、地表面にも礫が散乱している。西へ100m程進むと甲西バイパス予定地に達し、北600mには七ツ打遺跡*7が存在する。この遺跡の南は遺跡分布調査においても遺跡の確認できなかった地帯である。

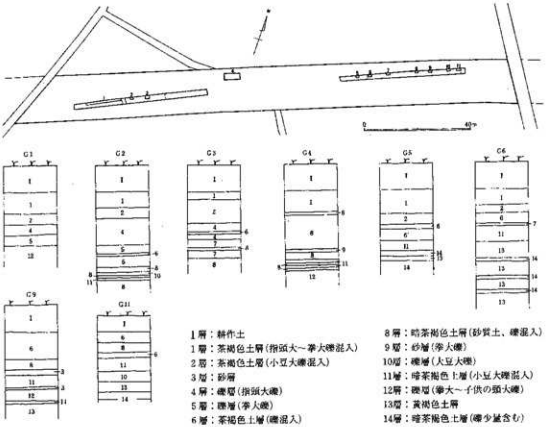
b　赤面C遺跡

赤面C遺跡は、西原B遺跡から西へ400m程進んだ櫛形町沢登字赤面から字七ツ打にかけて所在する。遺跡の一帯は、御勅使川扇状地の扇央部に位置し、北西方向から南東方向に緩やかに降っている。遺跡は、周囲に比較して50cmほど高い微高地上に占地している。この微高地は北西から南東に延びる幅30～50mの尾根状の地形で、今回の調査はほぼその先端部にあたる。この尾根の線をまっすぐに500m程南東に進むと十五所遺跡が存在する。本遺跡の南及び西方向は遺跡の存在の希薄な地帯である。

3）調査の方法と経過

a　吉田西原A・B遺跡

町道11号線は吉田西原A遺跡の北端部と、同B遺跡の南端部に接して進んでいる。そのため町道建設予定地内の各々の隣接地に2×50mの試掘トレンチ各1本を設定した。さらに西側トレンチ脇に2×6mの小トレンチを1カ所設けた。トレンチは便宜上、西から第1、2、3トレンチと呼称した。掘り下げは土層の状況を見ながら1.8～2mまで重機によって行い、後人力で精査した。両トレンチとも30～40cmの耕作土の下位は、礫・砂礫層及び礫が多量に混入した層となっており、2～2.2mを越すと拳大から人頭大の礫を主体とする層に変わる。部分的に地表下1.5～1.8m程でローム質黄色土の混入した茶褐色土が確認しうる箇所も在るが、遺物等は全く出土しなかったため調査を完了した。



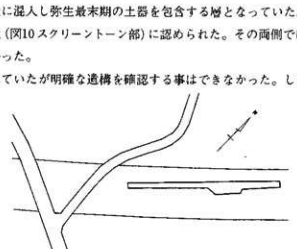
第8図　町道11号線建設用地内吉田西原A・B遺跡試掘トレンチ位置図及びセクション図〔1／1200・1／60〕

b　赤面C遺跡

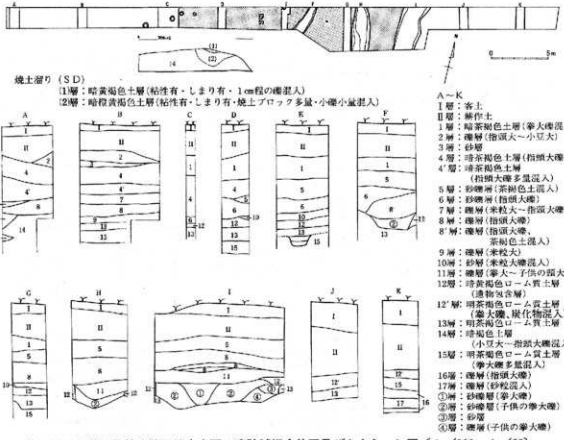
道路予定地は、三角形状に南へ延びている赤面C遺跡の南端部を通っている。遺跡は尾根上の微高地にのっているため、その幅にあわせ幅2×50mのトレンチを東西方向に設定し、中間部分の一部を幅4mとした。掘り下げは土層の状況を見ながら重機によって行った。耕作土の下位は厚さ60～80cmの礫・砂礫層となっていたが、その下部地表下1.5～1.8mでローム質土層を確認したため、以下は人力で掘り下げつつ精査を行った。このローム質土層の上部は10～15cmの厚さで、焼土、炭化物が多量に混入し弥生最末期の土器を包含する層となっていた。この包含層は、トレンチの中央部15～20mに亘って台状（図10スクリーントーン部）に認められた。その両側では、ローム質土層は順次落ち込み遺物等も全く認められなかった。

ローム質土層の上面には、幾条か自然の流路が刻まれていたが明確な遺構を確認する事はできなかった。しかし先述した包含層中には、3箇所の焼土溜まりが検出され、形態不明の鉄製品も出土した。

今回の試掘調査では遺構の確認はできなかったが、土器・焼土が認められ遺構が隣接する可能性を強くうかがわせた。そのため、町教育委員会では山梨県教育委員会の指導も受け、さらに範囲を拡げて試掘を実施することとし町建設課とも協議をおこない、年度明け早々に調査に入ることとした。



第9図　町道11号線建設用地内赤面C遺跡試掘トレンチ位置図〔1／1200〕



第10図　町道11号線建設用地内赤面C遺跡試掘全体図及びセクション図〔1／300・1／60〕

4）出土した遺物

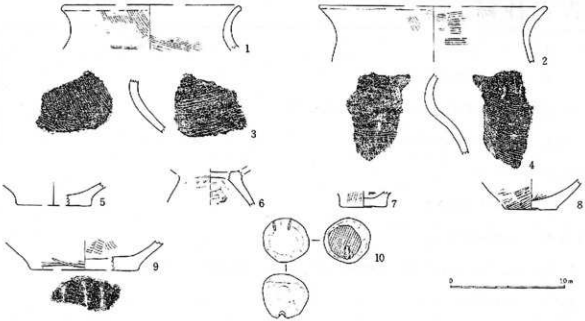
赤面C遺跡

幅20m 程の範囲から、コンテナ1箱の土器、鉄製品1点が出土した。

1壺口縁破片。頸部は「くの字」に立ち、胴部の膨らみは少ない。口径(20cm)。外面斜ハケのちナデ、口唇部ナデ、内面胴部ハケ、口縁部ハケのちナデ。色調淡赤褐色。焼成は甘い。胎土は雲母・長石・細砂粒を含み密。　2壺口縁破片。口径（15.8cm）。頸部は垂直気味に立上がり外反する。外面胴部横ハケ 口縁部斜ハケのち横ナデ、内面胴部斜ハケ、口縁部丁寧な横ナデ。色調明茶褐色。焼成良好。胎土は雲母、細砂粒を含み密。　3甕肩部破片。外面粗いハケ、内面胴部ハケ、頸部ナデ。　色調淡赤褐色。焼成は甘い。胎土は長石・細砂粒を含み密。　4甕頸部～胴部破片。外面胴部ハケ、頸部横ナデ、内面胴部ハケ、頸部丁寧な横ナデ。色調暗褐色。胎土は雲母・細砂粒を含みやや粗。　5台付甕脚部破片。接合部径（5.4cm）。外面ハケ、内面（シボリ）ハケ。色調茶褐色。焼成良好。胎土は細砂粒を含み密。　6壺底部1／3。底径（6.6cm）。色調黄茶褐色。焼成普通。胎土は雲母・細砂粒を含み密。7小形壺底部完。底径4.0cm。外面底部ナデ。色調淡明褐色。焼成良好。胎土は雲母・細砂粒を含み普通。　8壺底部1／2。底径4.5cm。外面胴部粗いハケ、底部丁寧なナデ、内面丁寧なナデ。色調赤茶褐色。焼成はやや甘い。胎土は雲母、細砂粒を含みやや粗。　9壺底部1／3。底径(9.6cm)。外面底部木葉痕、内面胴部ハケ。色調淡橙褐色。焼成良好。胎土は長石・細砂粒・赤色粒子を含む。10土製品。頭部径3.9cm、現存長4.1cm。頭部は扁平で丸味を帯びる。把手状を呈し、破断面の径は2.9cm。破断面に径5mm程の穿孔痕が残り、頭部にも1cm程の同様の条痕がつけられる。色調淡橙褐色～茶褐色。焼成良好。胎土は長石・細砂粒を含みやや粗。土器の把手類であろうか。

鉄製品　錆が全体を覆うため図示できないが、4.2×2.8cmの大きさで半円形をなしている。

今回出土した土器は、図示しえなかったものも含めほぼ同一時期の所産と考えられ、当該地域でいえば六科丘遺跡**と同じ時期と考えておきたい。



第11図　出土遺物〔1／3〕

第Ⅲ章　結　　語

本書に於いて報告したものはすべて試掘調査の成果である。そのため、遺構は検出されず、目立った遺物も発見されなかった。しかし、赤面Ｃ遺跡において再度試掘の要があり、八田畑Ｂ遺跡も今回の試掘地点の周辺に遺構の存在を感じさせるものがあった。

ところで従来から、櫛形町の東半部や北半部では御勅使川の扇状地堆積物のため、地表面において近世・近代の遺物が採取しうる他は、遺構・遺物の発見はしえなかった地域であった。しかし近年の発掘調査の進展や試掘調査の実施によって、部分的ではあっても中世以前に遡る遺跡の可能性を指摘したところである*9。今年度の調査では、町内扇状地上の２ヶ所において弥生時代の遺物が出土しており、かつ赤面Ｃ遺跡においてはかなり良好な遺存を示している。今後、この釜無川以西の地域ばかりでなく甲府盆地全体への弥生文化の伝播についても新たな基礎的な資料の追加の可能性も期待しうるものと云えよう。また、丹念な試掘調査を繰り返すことによって、地域の歴史的発展過程ばかりでなく、扇状地の地理的な生成過程にも迫りうる可能性を示すものといえよう。

ともあれ、今後の開発に際してさらに埋蔵文化財の保護の必要性を訴えるものである。

引用・参考文献

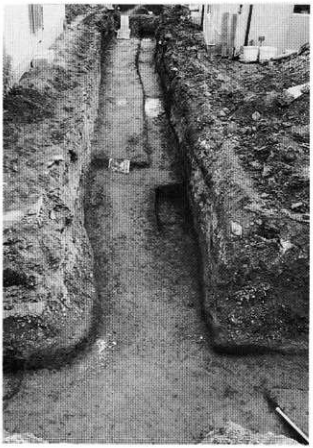
註１　櫛形町教育委員会　1990　櫛形町文化財調査報告No.8『町内遺跡詳細分布調査報告書』
註２　山梨県教育委員会　1994　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第90集『村前東Ａ遺跡概報１』
　　山梨県教育委員会　1995　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第103集『村前東Ａ遺跡概報２』
　　山梨県教育委員会　1996　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第112集『村前東Ａ遺跡概報３』
　　山梨県教育委員会　1995　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第104集『十五所遺跡概報１』
　　山梨県教育委員会　1996　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第113集『十五所遺跡概報２』
註３　櫛形町教育委員会　1990　櫛形町文化財調査報告No.13『榊平Ｂ遺跡』
註４　雄山閣　昭和43年　大日本地誌大系　『甲斐国志』
　　同書巻之四十九古跡部第十二には「御所ノ庭　村ノ西ニ在リ松樹鬱蒼方四十間許リノ間地ナリ相伝フ小笠原長清居屯ノ南庭ニシテ（云々）」とある。
註５　小笠原小学校創立100周年記念事業実行委員会　　1974『100年“小笠原小学校100年誌”』
註６　註３に同
註７　山梨県教育委員会　1991　山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第60集『七ツ打Ｃ遺跡調査報告書』
註８　櫛形町教育委員会　1985　櫛形町文化財調査報告　No.3『六科丘遺跡』
註９　註３・註７に同

報告書抄録

ふりがな	ちょうないいせきしくつちょうきほうこく		
書　　名	町内遺跡試掘調査報告		
副 書 名	町道11号線建設に伴う赤面C遺跡試掘調査他		
シリーズ名	櫛形町文化財調査報告	シリーズ番号	No 15
編著者名	清水　博		
発 行 者	櫛形町教育委員会		
編集機関	櫛形町教育委員会		
所 在 地	〒400-03　山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1　TEL 0552--82－0108		
発行年月日	1996年3月30日		

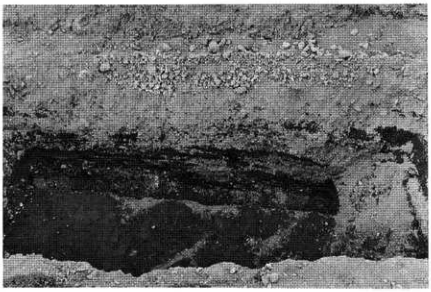
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
赤面C遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町沢登字赤面	193909		35度 37分 16秒	138度 28分 31秒	19960201 ～ 19960213	120	町道11号線建設に伴う試掘調査
八田畑B遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町小笠原八山畑	193909		35度 36分 44秒	138度 28秒 08秒	19950710 ～ 19950719	217	ボーリング場等建設に伴う試掘調査
若宮遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町山寺字若宮	193909		35度 36分 22秒	138度 27分 45秒	19950731 ～ 19950803	10	個人住宅建設に伴う事前調査
吉田西原A・B遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町吉田字西原	193909		35度 37分 18秒	138度 28分 47秒	19951206 ～ 19951209	206	町道11号線建設に伴う試掘調査
小笠原氏館跡遺跡	山梨県中巨摩郡 櫛形町小笠原字流間	193909		35度 36分 27秒	138度 27分 55秒	19880820 ～ 19880823	120	小笠原小学校改築に伴う事前調査

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤面C遺跡		弥生終末	焼土溜まり	土器、鉄器	
八田畑B遺跡		弥生中期		土器	
若宮遺跡					今回の試掘地点は遺跡範囲外
吉田西原A・B遺跡					今回の試掘地点は遺跡範囲外
小笠原氏館跡遺跡					今回は遺構・遺物等は確認できず



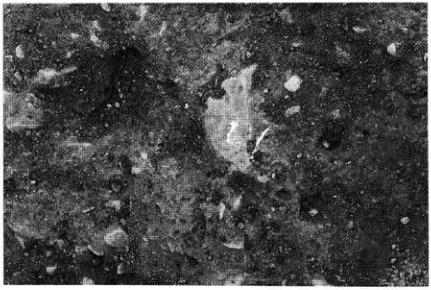
アルプス出店地内試掘
第1．2　トレンチ交差部

吉田西原B　トレンチ全景

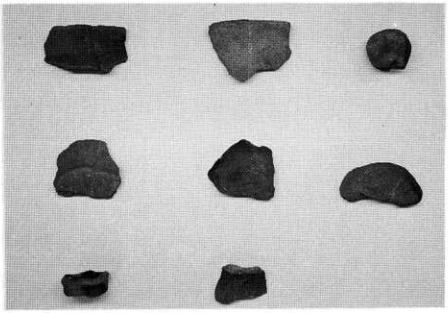


吉田西原B　土層堆積状況

赤面C遺跡トレンチ全景



赤面C遺跡焼土ブロック 散乱状況



赤面C遺跡出土遺物

櫛形町文化財調査報告　No.－15

町内遺跡試掘調査報告

山梨県中巨摩郡櫛形町町内遺跡試掘調査報告書
1996年　3月20日　印刷
1996年　3月30日　発行
編集・発行　櫛形町教育委員会
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1
印　刷　野中印刷
山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原